

「約束の共同体」という

呪縛

福島第一原子力発電所事故が
吹き飛ばしたもの

深尾葉子

fukao yoko

福島第一原子力発電所の事故は、これまで「五重の壁」に守られていますので原子炉は安全です」「津波や地震対策は万全を期しているので、万一の場合も多重の安全対策が講じられております」といった政府および東京電力の言説の虚偽を世界中に知らしめた。

しかし、事故後も政府、保安院は「格納容器の健全性は維持されています」「すぐさま健康に影響がでることはありません」といった報道を繰り返し、その結果、住民の被曝被害を助長することとなった。

一連の事故後の対応は、「技術」や「危機管理」における日本政府および日本の技術力への信頼を根底から突き崩し、さらには、放射能汚染物質の安易な拡散により、日本の食品の「安心」「安全」ブランドを徹底的におとしめることとなった。また、政府の「安全報道」により福島および関東一円の住民も、「政府があのように言っているのだから大丈夫」と、緊急避難や移住を控え、学校、職場、地域社会で、「いつもどおり」に振る舞うことがよいという「空気」が醸成された。子供

をつれて遠くへ避難しようとする母親は「裏切り者」という烙印を押され、親族からも白い眼で見られることになる。福島やその周辺の母親たちが子供を連れて避難しようとして、舅姑や配偶者である夫にまで反対されて、ついに「原発」離婚にいたるケースがツイッターなどでもしばしばつぶやかれた。

少し冷静に考えるならば、「危険」な状態を「安全」といい、拡散を防ぐべき放射性物質や放射能汚染された食品を全国各地に拡散させ、子供や一般市民に広く摂取を呼びかけることは、一国の危機管理としては、まさに「自滅行為」ともいえる。また、あのような放射性物質の大量飛散状況のもとで、すぐさま子供を避難させないでいることは、子孫の安全を脅かす危険行為だ。

ここで問題にしたいのは、なぜ、「幻想」や「虚像」にしがみついて自らの存続や安全を脅かすのか。正しく事実を直視し、それにふさわしい対応をとることができないのか、ということである。

近年、われわれは「魂の植民地化・脱植民地化研究」を進めており、こうした現象を「呪縛」の所作と考え、その作動を明らかにしようとしてきた。

人間は社会的存在であるため、生きてゆくためにさまざまな「学習」を行い、外界から取り入れた「常識」や「作法」によって自ら

の行動を律する。それは通常、社会的動物である人間の存在の安定性を高め、集団への適応能力を高める。しかしそのような「生存」のための学習が、「欺瞞」によって悪用されたり、あるいは「思考停止」を招いている場合には、それは「自滅」への選択を導く。

今回の福島第一原子力発電所事故は、原子力政策の欺瞞とそれによって心を奪われた人々がその「虚像」にしがみつき「現実」を直視できず、被害と危機をより深めるというプロセスが顕著に表れた。それは、「原子力の平和利用」を謳う「原子力発電」そのものがもつ本源的欺瞞と、それを推進し擁護してきた政府、学者、利害関係者の「集団的思考停止」がもたらしたものであり、それが事故の被害をより深刻なものとし、事故対応を遅らせる原因となった。

さらに、被害者であるはずの住民も、そうした「危機を直視したくない」ために、「政府が安全だ」といつているので大丈夫」と自らに言い聞かせてより危機を深める。しかし、ここに重要なヒントが隠されている。今回の福島第一原子力発電所事故で、危機を深める行動を助長しているのは、すべて「共同体」的な「危機管理」という土壌であるという点である。

危機の管理を他人任せにし、共同体(国家や地域)が何とかしてくれる、と考える共同

体的危機管理は、こうした事態にきわめて弱い。ともすれば、個人の危機回避が抑制され「共同体」の利害が優先となり、自律的な判断の材料が奪われるためである。

放射能は目に見えず、危機が「体感」されにくい。それがゆえに、情報によって容易に操作される。福島原発の事故は、「原子力発電は安全である」という国家主導の「共同体幻想」を吹き飛ばした。と同時に、「政府が何とかしてくれる」という共同体的他者依存による「安全幻想」も吹き飛ばした。さらには、「家族や地域社会」が危機を救うよすがとなる、という「幻想共同体」の虚偽も明らかにした。放射性物質の大量拡散という異常事態において、これまで危機を隠ぺいしてきた「共同体幻想」が、ことごとく洗い出されることとなったのである。

テレビも大規模メディアも、電力会社や国策の宣伝媒体となり、真実を伝えないなか、インターネットや独立メディアが真実を伝える役割を果たした。依然、事実を認められず、「幸せなはずの家族」「安心を保障してくれるはずの国」「安全なはずの原子力」という「幻想」にしがみつくものは、事実を認識できずみずからの危機を増幅させる。一方、ネットワーク的な情報を自らあつめ、より開かれた世界に救いを求める人々は次々と自らを救う道をもとめて動きはじめる。

そのような動きは、旧来の「共同体社会」に生きる人々から見れば「秩序の破壊」と映るかもしれない。しかし、東北の津波のなかで、より多くの人が生存した三陸大槌湾の人々が「津波のときはてんでんこで逃げろ」と言い伝えたように、放射能の危機は自らが自衛的に動かなければ決して乗り越えることはできない。世界一の堤防を過信し、また行政が定めた「避難マニュアル」どおりに避難しようとした地域では、逆に多くの人々が犠牲になった。同様に、国の安全報道に身をまかせ、自らの危機意識に「蓋」をして「偽りの安全安心」を自らに信じ込ませようとするならば、危機は一層増大する。

この未曾有の危機のなかで、われわれは自らが開かれた他力のもとで活かされていることをあらためて認識し、「集団」による「共同体幻想」に呪縛されることをやめるべき時がきた。それは「秩序の崩壊」ではなく、より開かれた世界へ、自分の生をゆだね、そうした新たなつながりのなかで生きる道を模索する道である。そういう壮大な新たな組み換えを日本社会が経験すべきことを今回の危機はわれわれに教えている。

(ふかお ようこ・大阪大学大学院経済学研究科准教授
著書に「黄土高原・緑を紡ぎだす人々」「緑聖」朱序弼をめぐる動きと語り」風響社)